

献呈のことば

師から弟子に継承されるものとは、一体、何なのだろうか。

平田好成先生は、恩師・九州大学名誉教授・具島兼三郎先生の弟子たることを常に誇りにされていた。平田先生の御講義の際には、具島先生張りの大音声と「具島節」といわれた名調子が講義室内に轟きわたり、ユーモアに誘われた学生の爆笑が廊下に満ちあふれた。

昭和五六年、平田先生五二歳の折、それは学生部長の大任を終えられた間もない頃であったが、予測もしえぬ脳梗塞が先生の全身を襲った。言葉が奪われ右腕右脚が麻痺した。テニスが遠去かったのは無論のこと、講義室の大音声も名調子も笑い声も消え失せた。

先生は、医師による通常のリハビリ訓練を拒絶された後、熟慮の末、自らワープロ習得によるリハビリ訓練の道を選ばれ、見事、左手によるワープロ技術を習熟された。御家族、学科の同僚が見守るなか、その後、不断に論文を物されるに至った。

つまり、具島先生の真の教えとは、勉強・勉強することであった。勉強は、平田先生の一命を救い、先生独自のリハビリ方法を編み出し、研究者の神髄を顕らかにした。

平田先生は、病のあと、事あるごとに涙もろく大粒の涙を流されるようになった。しかし、今の涙は、冷たい冬の雨ではなく、春先きの暖かい透き徹った雨に近いように思える。われわれ一同、永きにわたる先生の御功績に感謝し、今後一層の御壮健を祈念しつつ、ささやかながら本記念号を献呈させていただく次第である。

平成九年三月吉日

法学科長 岡部 悟朗